

競争原理に劣化する後期中等教育

〈高校改革としての大学教育を〉



山内 亮史

(旭川大学学長)

一 高校教育への関心

大学関係者が教育を論ずるとき、しばしば「原因委譲の法則」とでもいうべき話のオチに行き当たることが多い。

大学生の学力低下は、高校教育に原因があり、高校生の学力低下は、中学校教育に原因があり、中学生のそれは……。その最後は、家庭教育と社会の在り方に帰着する。

いうまでもなく、大学教育は密接不可分の形で高校教育と結び付いている。こういういい方がゆるされるなら今日、日本の大学の質は、その高校教育の持つ質に依存している。

さらにいえば、私はかつて学生時代市川昭午先生のゼミナールでグンナーミュルダール、ハービソン、マイヤーズなどの論文を学びながら、国民経済の進展に寄与する労働力形成にあつては、中等教育の質量の確保こそが決定的に重要であることを知った。

この命題の今日的意義を今、検証するわけではないが、日本の大学が、高等学校でどのような教育が行われているのかをもっと深く知り、理解することは只単に、大学の個別経営・教育・研究の課題のみならず、日本社会が直面する教育をめぐる問題でもあることを知るべきであると思う。大学及び大学教員はあまりにも高校の現状に暗いのではなからうか。

二 高校間格差の固定化

高校教育の今日の最大の課題は、高校教育の目標とは何なのか、という目標の混迷による空洞化、さらにはこの空洞化による「学びの危機」とその克服をはかる「新しい学びとの出会い」の内容と実質の創造にあると思われる。

ここ二〇年進化した能力主義の結果、学校間格差、学科間格差が拡大し、固定化することによって選別差別化が更に進み、「上位校」における高校教育の予備校化、「課題集中校」と呼ばれるいわゆる学力低位校における不本意就学と「学びの困難」が常態化している。このような学校間格差の拡大と序列の固定化は、生徒たちの心身に大きな負担を感じさせ、中等教育の在り方をゆがめる原因となっている。

過去にも受験競争や選別のための教育があり、その弊害が指摘されることは一貫して続いてきたといつてよい。しかし、それが今日ほど構造化されて問題となっていることはないともいってよい。教育が、とりわけ高校入試、大学入試において急速な商品の対象となつてゆくのは、市場経済の進展に伴うある種不可避のこととはいえ、テスト業者が現れ、予備校が乱立し、極端に高校教育における「学び」の内容が手段化されている。数量化され、標準化されやすい内容が次第に学校知として主流となり、教育基本法に謳う「人格の完成」はもとより、集団思考を伴う多様な高校教育における学びの世界が追いやられて、興味や知的な好奇心の展開が受験に必要か、否かで立ち停まってしまうのである。

かつては、同じ程度の高校が県内に複数存在し、そこに高校間順位など無理に作らなかったことがあつたかも

不自然であったように、現在では細分化し序列化されてしまうのである。

これまで仮に県内の一・二番目と二・三番目の高校間でその教育内容にどんな差があるのか全く問題にならなかつたものが、当の高校と高校生個人にとっては、大きな問題になってくるのである。さらに大学間のみでなく、同じ大学の学部学科毎に差が細分化されてゆく。

こうなると高校生は、受験勉強そのものよりも「受験関心」と「序列関心」という偏差値だけを気にする心性に陥るとの指摘は正鵠を得ている。

高校生は偏差値をめぐる世間の評判、親や教師の態度に微妙な差別を感じとり、あたかもそれによって「全人格」を評価されているように感じる。それが昂じると、自分の生き方を否定されるような不安を感じるようになるだろう。少子化は本来収容力を相対的に拡大するはずであるが、定員内不合格を当然とする上位校の適格者主義によって、高校の序列化はより固定化されたものとなってゆき、下にゆくに従って、子どもたちは限りなく学習のモチベーションが低下してゆく。保護者の不安も大きく、学校不信を生んでいる。結果として、不登校の増大、中退者の増大、ひきこもり、いじめ、暴力事件、犯罪といった「問題行動」を惹起している。最近、O E C D やユニセフなど国際機関によって日本の子どものメンタルヘルスに関する問題が警告され、教育の在り方、とりわけ過度の競争の下に日本の子どもが置かれていることにふれたのは故なしとしない。

さらに現在、拡大する階層間格差、貧富の差の拡大が子どもを襲っている現状がある。一昨年の統計では大阪府の高校生の二一％は授業料免除を受けているという。五人に一人である。現在、年収四〇〇万円以下の世帯では教育費が占める比率は家計の六〇％に達しているということである。(二〇〇二年国民生活金融公庫総合研究所)。この状況では下位層の子弟は、就学が希望とつながらず、いわゆる貧困の悪循環が発生してゆく。そして、高校生は各層格差にもとづく希望格差の間にいる。

三 高校教育の理念の喪失

このような高校生の学びの課題に対し、現実の政策とその展開、方法はあまりにも貧困である。それだけではない。問題なのはこのような傾向は強まりこそすれ改まる気配が少ないということである。

例えば、今、私の手許にあるY高校の入試選抜方法には驚かざるをえない。そこにはまず「求める生徒像(特に重視する選抜資料)」がある。ここでは高校が求める生徒像の区分を設け「国公立大学への進学という明確な目標を持ち、国語、社会、数学、理科、英語の教科において優れている者」というような生徒像があらさまに掲げられており、次いで「有名私大」が続いている。

「求める生徒像」といえば、その高校の理念であろう。少なくとも「真理を愛する心」「思考する喜び」そして「社会性を有すると共に個性豊かな」といった教育目標、教育哲学があってしかるべきであろう。また、五教科に優れている者といった露骨な受験教科の偏重も気になる。創造性と結びつく芸術や生きる基礎力を形作る健康・体育はどう考えるのか? 教育哲学の貧困としかいいようがない。このY高校の求める生徒像は特殊な個別事例ではなく、ある意味で、名門校とよばれる進学校のホンネそのものであろう。

これは到底二一世紀の国際社会で通用する高校教育ではありえない。

このような狭い学力向上を至上とする教育政策を国家、社会、保護者が一体になって押し進め、それが子ども将来のためという名分の元に高校生に覆われるとき、学びは強制された成功への手段であり、その学びの有効性と知の普遍的な価値との落差を生み「この受験勉強、テストのための勉強は本当の勉強ではない」と意識され、大学入学は、同時に「勉強からの解放、学びからの逃走」として映るはずだ。

四 市民的教養の基礎をこそ

いささか今日の日本の高校教育を否定的に捉えすぎたかも知れない。全国各地、各高等学校において、もっと生き生きとした多様な高校教育の実践が行われており、精神的に新しい高校生の学びを創造している教師達がいることも確かである。

側聞するそれら高校の学びは、市民的教養の基礎の完成という課題に向かって行われているといつてよい。それは二つの側面を有している。一つは市民的教養を身につけ、市民社会の構成員として青少年少女を育成するという統合的に働く側面、二つは教養の個性化・多様化という遠心的に働く側面である。前者は、自然認識、社会認識そして芸術的創造として人類史が有する知的財産を学習することによって市民生活への基礎的な準備を行うことを意味する。学習意欲を考えれば、それは、現代にあつては、教科学習指導要領として選定されたものではなく、平和、人権、環境、生命、ジェンダー、地域、情報といった課題と連動することが大切であろう。後者は、高校生にもなると、その学びが個人の興味関心の伸長に対応しなければならぬことを意味している。高校生一人ひとりの個性的資質が差異と多様性において社会的にも人間的にも意味があり、その能力の発揮が主体的に自信をもって生きてゆく糧になるよう育まれなければならない。

こう考えてくると、これら高校生の学びは、そのまま大衆化された大学の学びであることに気付く。これは二〇〇二年中央教育審議会が述べた「新しい教養教育の在り方」でいう、『教養とは「個人が社会とかかわり、経験を積み、体系的な知識や知恵を獲得する過程で身に付ける、ものの見方、考え方、価値観の総体」と重なる。

今大学は、志願者獲得のための高大連携を越えて、高校生の学びとの出会いを可能とする教育を内に創造しつつ高校改革と響き合う改革を押しすすめる努力が求められている。